

# 孤独・孤立問題の背景と政策対応

近年、さまざまな社会問題の背景に、人びとの孤独・孤立問題があるのではないかと指摘され、政府も担当大臣を置いて取り組みを始めた。とはいえ、この問題には特有の難しさも潜むという。孤独・孤立問題に関する研究者に、問題の背景を解説いただいた。



早稲田大学文学部教授

石田光規

## 孤独・孤立への注目

近年、社会現象としての孤独・孤立に注目が集まっている。メディアで取りあげられる機会も増え、孤独や孤立がセンセーショナルな事件や社会問題と結びつけられるようになった。

二〇二一年一月、大阪市北区でおきた放火殺人事件では、死亡した容疑者がスマートフォンで「死ぬときくらい注目された」と検索していたことから、孤独・孤立の問題が指摘された。自殺や虐待の要因として孤立が指摘されることも少なくない。

二〇二二年二月には、内閣官房に孤独・孤立対策担当室が設置され、二〇二二年四月には、同室が中心となって行った孤独・孤立の実態把握調査の結果が示された。満一六歳以上の人を対象にしたこの調査で、孤独感が「しばしばある・常にある」と回答した人は四・五%、「時々ある」は二四・五%、「たまに

ある」は一七・四%であった。

三五%強の人が孤独感を抱いているという事実は、社会に驚きをもって迎えられた。そこで、本稿では日本社会で孤独・孤立が注目されるようになった背景を整理し、孤独・孤立がなぜ「問題」なのか、政策的対応をどのようにすればよいのか、論じてゆく。

## 日本社会の孤独・孤立問題の変遷

### 三つの区分

孤独・孤立に注目が集まるようになったのは、第二次世界大戦よりも後のことである。

第二次世界大戦前から戦後しばらくの間までの日本社会は、第一次産業人口が多くを占める農業社会であった。農村で問題視されていたのは、孤独・孤立よりもむしろ、強すぎる集団的

体質であった。このような社会でも「村八分」のような形で、孤独・孤立は見られたものの、社会問題として注目されるまでにはいたらなかったのである。

戦後の孤独・孤立問題の経緯をたどると、一九七〇年代の第一期、一九九〇年代半ばの第二期、二〇〇〇年代以降の第三期に分けることができる。以下では、それぞれの時期について簡単にまとめてゆく。

### 一九七〇年代：孤独・孤立への注目

孤独・孤立に最初に注目が集まったのは、高度経済成長を通じて、日本社会に大きな構造変動が生じた一九七〇年代初頭である。

戦後の高度経済成長を経て、日本社会は、働く父親と家庭を守る母親がつくる核家族が「標準」とされるサラリーマン社会へと変貌を遂げた。閉鎖的な農村社会から解放された人びとは、家族と会社に再度取り込まれたのである。

### いしだ・みつる

一九七三年神奈川県生まれ。東京都立大学大学院社会科学部単位取得退学。博士社会学。大妻女子大学専任講師、准教授。早稲田大学文学部准教授を経て二〇一六年より現職。孤立やつながりづくりなど、現代社会の人間関係に焦点をあてて研究をしている。著書として『人それぞれ』がなみしい(筑摩書房、二〇二二年)、『友人の社会史』(晃洋書房、二〇二二年)、『孤立不安社会』(勁草書房、二〇一八年)、『つながりづくりの隘路』(勁草書房、二〇一五年)など多数。二〇二二年一月から内閣官房孤独・孤立対策担当室「孤独・孤立対策の重点計画に関する有識者会議」委員。

サラリーマン社会への変貌は、世帯の核家族化を押し進めると同時に、孤独・孤立の問題を生み出した。そこでの注目は、子どもと離れてくらす単身高齢者である。一九七〇年代には「一人ぐらしの高齢者」の事故を扱う新聞記事が増え、厚生省(当時)や全国社会福祉協議会も実態調査を行った。

しかし、当時の孤独・孤立問題は、高齢者福祉問題に収斂され、注目の度合いは、相対的にうすかった。

### 一九九〇年代半ば：被災者の問題として

次に、孤独・孤立に注目が集まるのは、阪神・淡路大震災が発生した一九九五年である。阪神・淡路大震災のおりには数多くの被災者が仮設住宅に入居した。額田勲が指摘するように、仮設住宅では孤独死が頻発した。震災を契機として改めて、孤独・孤立に注目が集まったのである。

額田が著書『孤独死』(岩波書店刊)で指摘していたように、仮設住宅で発生した「孤独死」は、災害特有のものではなく、震災前の被災地がもともと抱えていた矛盾をあぶり出したものである。孤独死した人は、もともと身寄りがなく仮設住宅に身を寄せた人が多かった。その意味で、被災地における孤独・孤立問題は、二〇〇〇年代に展開される議論を先取りしていたと言える。しかし、一九九〇年代に、社会現象としての孤独・孤立に注目が集まる機運は生まれず、孤独・孤立は高齢者や被